

# 外骨『山東京伝』に関する覚書

山本和明

## 要旨

大正五（一九一六）年十一月二十日に刊行された『山東京伝』は、近世後期を代表する戯作者山東京伝の全貌を捉えた初の専門書として、そこに記された多様な資料の紹介の点からも、今日なお評価が高い。本書の編者は宮武外骨。京伝百回忌を記念しての刊行物である。本書執筆に関連した資料が、東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫に残されていることはあまり知られていない。その資料と当時の新聞記事などから、『山東京伝』刊行をめぐる諸事情、ならびに京伝百年祭について確認したい。



はじめに

文化十三（二八一六）年九月六日のこと、戯作者山東京伝は、弟京山の書斎新築を祝うべく、自身の合巻執筆を中断し出かけて行つた（この日京伝は明春出版の草冊子を創して、初更に及べり。京山が使しばしば来るを以、遂に筆を投て其家に赴きつ。『伊波伝毛之記』。祝宴の場で狂歌堂真顔や北静廬などと歓談し、京伝は静廬とともに帰路にいたが、途中で気分が悪くなり、なんとか家に辿り着くものの、翌七日丑の刻なれば過ぎに息絶えることとなる（やうやうやどに帰りてなやみつよく、つゝに丑の刻半すぎる比に息たえぬ。「丙子掌記」。享年五十六歳。翌八日に葬儀が回向院にて営まれる。稀代の戯作者のあつけない最期であつた。その年の冬に弟京山が、兄京伝の考証成果を記した遺稿「むくむくの小袖」を版にし、『無垢衣考』と題して知人たちに配っている。

それから一世紀。大正五年（一九一六）年が、京伝歿後百年目にあたる。明治時代に新暦となつたため、十月三日がちょうど百年忌日に該当する。その京伝百回忌を記念して刊行されたのが宮武外骨編纂『山東京伝』なのである。初版刊行日時は大正五年十一月二十日。戯作者山東京伝の全貌を捉えた初の専門書と言える。そこに記された多彩な資料や発言は、研究上、今日なお非常に参考となるものである。十月八日に菩提所回向院で執行された「山東京伝先生百年祭」に併せて、同所で遺物展覧会が開催されたが、その展覧リストに該当する「山東京伝百年祭記念遺物陳列目録」掲載の諸資料などは、その存在だけで貴重な研究資料と言える。

ところで、この『山東京伝』執筆にあたって、外骨が作成したノートなどの関連資料が、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫（以下、明治新聞雑誌文庫）に残されていることはあまり

知られていない。今回の考察では、一連の資料と当時の新聞広告・記事などから、『山東京伝』刊行をめぐる諸事情ならびに「山東京伝先生百年祭」等について確認したい。残された資料群からは、その全容を解明するというにはほど遠い。「覚書」とした所以である。

### 明治新聞雑誌文庫所蔵資料について

明治新聞雑誌文庫には、初代文庫主任であった宮武外骨が、主任就任後におこなった新聞・雑誌の蒐集旅行記録、原稿の下書き、パンフレット類、絵葉書等々、様々な資料が「外骨書函パンフレット類」として整理されている。その「外骨書函」のなかに『山東京伝』執筆関連資料が存する。近年、東京大学の学術資産アーカイブ化推進室などが中心となり、東京大学所蔵資料のデジタル画像オンライン公開が進展しているが、二〇一八年十月十一日付の明治新聞雑誌文庫ホームページでの「お知らせ」により、「宮武外骨蒐集資料」のオンライン公開が開始されたことを知った (<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/gaikotsu/page/home>)。「山東京伝」と検索することで、一連の資料群を国際的な規格 IIIF のもと、ウェブ上で閲覧可能であるのみならず、一括ダウンロードすることも可能となった。前任校にいた時分、何度か閲覧に伺った者として、この資料公開に一人の研究者として深謝するとともに、今回の考察も資料群を丹念に確認できたことによるものであることを附記しておきたい。

以下、そのリストを掲げ、すこし簡略な注記を加えておく。

■ 「山東京伝関係資料」三綴。山東京伝の印譜、年表など外骨によるメモ及び雑記等切抜。

- 山東京伝関係資料(1) (請求記号: GP910.2:S67:1)  
シリーズ名: 山東京伝関係資料 一綴、二四纏  
※京伝印譜・山東京伝年表
  - 山東京伝関係資料(2) (請求記号: GP910.2:S67:2)  
シリーズ名: 山東京伝関係資料 一綴、二六纏  
※草稿メモ(京伝の創案・京伝と豊国の稲妻双紙・山東京伝(北尾政演)肉筆画并板物・商人としての京屋伝蔵・門人等)
  - 山東京伝関係資料(3) (請求記号: GP910.2:S67:3)  
シリーズ名: 山東京伝関係資料 一綴、二六纏  
※「山東京伝一代記」・「伊波伝毛之記」・燕石十種「戲作六家撰」・草稿メモ・葉書・拓本・協力者からの情報等・校正刷・版本切抜等々
  - 『山東京伝』刊行関係資料
  - 『外箱』『山東京伝』 (請求記号: GP910.2:S672:1)  
シリーズ名: 『山東京伝』刊行関係資料 一点、二九×二二纏  
※和装活版本『山東京伝』外箱のみ
  - 『山東京伝』 (請求記号: GP910.2:S672:2)  
シリーズ名: 『山東京伝』刊行関係資料 一冊、本文八八頁十目錄六頁、二七纏
- ※和装活版本『山東京伝』 編纂者宮武外骨、発行者函画刊行会、発行所吉川弘文館、大正五年十一月十八日

印刷、大正五年十一月二十日発行、定価壹円五拾銭

□山東京傳先生百年祭記念品（請求記号：GP910.2:S672:3）

シリーズ名 『山東京伝』刊行関係資料 歳旦封書入一通、一八×四〇糎

□「山東京傳百年祭 附 遺物展覧會」（請求記号：GP910.2:S672:4）

シリーズ名 『山東京伝』刊行関係資料 六枚、二九×四〇糎、大正五年七月

※『山東京伝』広告チラシ、後半に「山東京伝先生百年祭附遺物展覧會」（大正五年十月三日開催予定）発起文あり。

□切抜き（請求記号：GP910.2:S672:5）

シリーズ名 『山東京伝』刊行関係資料 四枚、十×九糎

※紙製蓮弁（散華に用いるもの）

□広告（請求記号：GP910.2:S672:6）

シリーズ名 『山東京伝』刊行関係資料 二枚

※国民新聞広告切抜、『山東京伝』出版広告チラシ（S672:4とは別のもの）

□「塩冶判官 市川団十郎」（請求記号：GP910.2:S672:7）

シリーズ名 『山東京伝』刊行関係資料 北尾政重画、一枚、三四×一八糎

※浮世絵、ただし『山東京伝』に引用掲出等されていない。

こうした資料群と当時の新聞記事などから、外骨が如何にして『山東京伝』を制作したのか、その一端を確認してみ

たい。

### 刊行に至るまで

『山東京伝』緒言で、本書制作事情について宮武外骨自らが次のように述べている。

茲に於て予は専ら京伝の著画作物に就て、従来の伝記書中に見えざる資料を蒐集せんと欲し、短日月ながらも約二ヶ月間の昼夜、専心専意に涉獵を怠らざりしなり、素浅学菲才の者、孟浪杜撰は免れざるべしと雖も、予が二ヶ月間の努力と熱心は、必ず読者に認めらるべき所あらんと自ら信ずるなり

中野三敏はこの発言に対し「内容に鑑みて、二ヶ月の資料集めというのは殆んど信じられぬほどに短い」と評する<sup>(1)</sup>。実際、本書刊行については、東京朝日新聞の大正五年七月二十六日「文藝美術」欄に「▲山東京伝 京橋新栄町の風俗絵巻図画刊行会にては宮武外骨氏編「山東京伝」を發行し且十月三日其百年記念遺物展覧会を催す計画中である」とあり、雑誌「みなおもしろ」第一巻第四号（大正五年七月）の「彙報」欄で「宮武外骨氏は故山東京伝翁の百年祭を来る十月三日（旧曆九月七日）を以て執行し、翁の遺墨遺著等をも展覧に供する筈なるが、尚夫までに（略）調査を重ね、一の伝記をものにして八月末に發行の筈」とある<sup>(2)</sup>。このように、公には七月段階で百年祭の開催を宣言し（当初は命日にあたる十月三日開催予定であったと判る）、「山東京伝」と題した伝記に関わる書籍の刊行を明言していることになる。彩色入の一枚刷『山東京伝』広告がこの時期に出されており、明治新聞雑誌文庫にも収蔵されるが

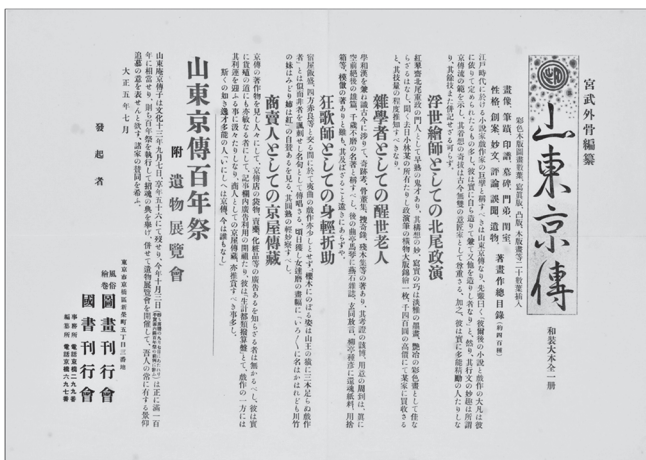


図1 『山東京伝』 広告

(GP910.2:S672.4) の一枚刷では既に書籍として具体的な構成案も掲出される。また後半の「山東京伝先生百年祭附遺物展覧会」発起文では「諸家の賛同を希ふ」とし、遺物展覧会への賛同、すなわち出品や支援を求めている。以下、図版とともにその本文をあげておく【図1】。

宮武外骨編纂

「山東京伝」和装大本全一冊

彩色木版図画数葉、写真版、凸版、木版画等二十数葉挿入

画像、筆蹟、印譜、墓碑、門弟、閨室、性格、創案、妙文、評論、誤聞、遺物、著画作総目録（約四百種）

江戸時代に於ける小説家戯作家の巨擘と称すべきは山東京伝なり、先輩曰く「彼爾後の小説と戯作の大凡は彼に依りて定められたるもの多し、彼は自ら造りて兼て又他を造りし者なり」と、然り、其行文の妙趣は所謂京流の範を示し、其着想の奇技は古今無双の意匠家として尊重さる、加之、彼は実に多能精励の人たりしなり、其余技また併記せざる可らず。

浮世絵師としての北尾政演

紅翠齋北尾重政の門人として早熟の鬼才あり、其構想の妙、写実の巧は淡雅の墨画、艶冶の彩色画として佳ならざるはなし、聞く去日小林某の所有たりし政演筆の横物大版錦絵一枚、千四百円の高価にて某家に買取さると、其技量の程度推知すべきなり。

雑学者としての醒世老人

学和漢を兼ね識古今に涉りて、奇跡考、骨董集、搜奇録、残木集等の著あり、



其考証の該博、用意の周到は、真に空前絶後の雄篇、千歳不磨の名著と称すべし、後の曲亭馬琴に燕石雜誌、玄同放言、柳亭種彦に還魂紙料、用捨箱等、模倣の著ありと雖も、其及ばざること遠きにあらずや。

#### 狂歌師としての身軽折助

宿屋飯盛、四方赤良等と交る間に於て夷曲の戯作亦少しとせず、「桜木にのぼる姿は山王の猿に三本足らぬ戯作者」とは似而非者を諷刺せし名句として伝唱さる、頃日獲し女達磨の画幅に「いろ／＼に名はかはれども川竹の妹はみどり姉は紅」の自賛あるを見る、其円熟の輕妙察すべし。

#### 商売人としての京屋伝蔵

京伝の著作物を見し人々にして、京伝店の袋物、売菓、化粧品等の広告あるを知らざる者は無かるべし、彼は美に貨殖の道にも亦敏なる者にして、記事欄内広告利用の開祖たり、彼は「生計都類撥算盤」とて、戯作の一方には其利運を迎ふる事に汲々たりしなり、商人としての京屋伝蔵、亦推賞すべき事多し。

斯くの如き逸才多能の人「いにしへは京伝、今は誰もなし」

#### 山東京伝百年祭 附 遺物展覧会

山東庵京伝子は文化十三年九月七日、享年五十六にて歿せり、今年十月三日（即ち旧曆の九月七日にあたり）平賀源内満百年祭の前例に倣ふ）は正に満一百年に相当せり、則ち百年祭を執行して招魂の典を挙げ、併せて遺物展覧会を開催して、吾人の常に有する景仰追慕の意を表せんと欲す、諸家の賛同を希ふ。

大正五年七月

発起者

東京市京橋区新栄町五丁目三番地

風俗絵巻図画刊行会

国書刊行会

事務所 電話京橋二九九番

編纂所 電話京橋六九七番

明治新聞雜誌文庫「山東京伝関係資料(3)」(GP910.2:S67.3)には大正五年七月十四日消印のある外骨宛の「一段、久兵衛(稿者注―三河屋久兵衛か)―」からの葉書が残されている。「京伝百年祭御催嘉奉存候 川柳家之一人に山東京山女系の市内京橋区(美岸嶋) 浜町七、川柳雜誌「花山車」喜音家古蝶あり」との文言も見られ、公に百年祭を執行することを明らかにした七月段階でなお、様々な情報を収集していたことも判る。この喜音家古蝶からも遺物展覧会に出品されており、また古蝶の記した山東庵の家系に関する資料も参照し、外骨は原稿を書いている。「短日月ながらも約二ヶ月間の昼夜、専心専意に涉猟を怠らざりし」とした外骨の発言も、あながち嘘ではなかったものと考えられよう。

### 百年祭・展覧に関することども

百年祭前日にあたる東京朝日新聞大正五年十月七日彙報欄には、「●山東京伝百年祭 本年は江戸文学の泰斗山東京伝の歿後滿一百年に相当するを以て京橋区新栄町風俗絵巻図画刊行会及国書刊行会主催となり八日両国回向院本堂に於て盛大なる記念祭を執行し尚当日同所に京伝遺物展覧会を開く由」との記事が掲載された。当日の十月八日には、読売新聞朝刊に、「完全な意味に於ける「時代の児」で、多才多能であつた彼は、猶且、種々の方面から記念せらるべき資格を持つてゐる。これ藤村、宮武二氏に其研究の一端を披瀝せられんことを請ひ、本欄の一半を割いた所以である」とし、藤村作「洒落本作者としての京伝」・宮武外骨「京伝瑣談」の小文を載せる。外骨はその中で「要するに馬琴は大なる偽物だ、私の今度の著述「山東京伝」はコツピドク馬琴の仮面をはがしてやらうとしたので、一面馬琴罵倒録だ」と、『山東京伝』の宣伝もかねて喝破している。外骨の記事を掲出しておく。

京伝瑣談 宮武外骨

▲京伝は馬琴の師匠である。馬琴といへば小学校の教科書にも出て居るだけに、千人の中百人位は知つてゐやう。けれども京伝に至つてはその十分の一の十人位しか知るまい。京伝の名を知つても、浮世絵師としての彼即ち北尾政演を知つた人はまた其十分の一位に過ぎない。

▲馬琴は絵のみならず、何かにつけて自分の競争者たる京伝を貶さうと努め、『伊波伝毛之記』を書いて京伝が吉原びたりをする事を悪く云つたり、射利家で遺財に志があつたと誹つてゐる。けれども吉原びたりをしたのは寧ろ性欲の満足を求めたからでなく、人情の機微に触れんとした為めで、それをしたればこそ四百種も戯作が出来たのである。また馬琴は京伝が妻の為に自分の死後の計を立てたのを諷してゐながら、自身はどうかと云ふと、金持の後家に入婿して一人息子の孫の為に蔵書まで売つて役人の株を買つたりしてゐる。要するに馬琴は大なる偽物だ、私の今度の著述『山東京伝』はコツピドク馬琴の仮面をはがしてやらうとしたので、一面馬琴罵倒録だ。

▲これは今度の新発見であるが、従来山東京伝といふ名が、愛宕山の東、京橋伝馬町に住んでゐたから出たとせられるのは附会の説で、伝蔵と称したのは父の伝左衛門から来て居り、山は愛宕山を指したのではない、天明七年に出した京伝の『始衣抄』の序文に、

楓葉山東隠士 京伝老人識

とあるのから察すると、楓葉山の東といふ意味に違ひない。この楓葉山とは今の宮城元の江戸城内の楓葉山を指したらしく、昔あつた中橋の架かつてゐた川は、楓葉山の紅葉が流れて来るので、楓川と称せられた、その如く京伝も江戸城内の楓葉山を床しく懐しく思つて、それに因んで斯く号したのであらう。

その会の様子についてうかがい知る資料は乏しいが、翌十月九日の東京朝日新聞には、百年祭および展覧に関する記事も出ており、多く参集した会であったようだ。

●京伝百年忌 山東京伝が世を去つてから今年で恰度百年になるので、其の百年忌が両国回向院で開かれた。来会者は京伝から六代目に当る京橋区靈岸島町の喜音屋正次郎（五十九）を始め、笹川臨風、淡島寒月、島崎柳塙等の文士画家連、松平子、安田善之助等知名の人々など約百五十人許りだった。読経後一同の焼香があつて式を閉じたが、遺物の堂内に展覧されたもの合計四百点、内珍らしい品は劇場の図（蜀山人の賛）、芸子色くらべ、天明年間吉原六ツ時、京伝、京山、焉馬、三馬合作の扇子等であつた。

京伝の家系である喜音家古蝶こと正次郎をはじめ、笹川臨風や淡島寒月、藏書家の安田善之助など、諸氏にわたる。これらの参列者は遺物展覧会に出品もしており、「遺物陳列目録」をみれば、珍しいものも展覧に付されていた。その一端が『山東京伝』を執筆する際の資料に用いられていることは言うまでもない。会場となった菩提所両国回向院は、明暦三年（一六五七）に開かれた浄土宗の寺院。明治新聞雑誌文庫「宮武外骨蒐集資料」には、この法要の際、用いられた蓮華弁型の華も残される（切抜き、GP9102:8672:5）。華を散らし仏を供養する際に唱える声明の一つ「散華」では、華籠に盛られた散華（生花や紙製の蓮弁）を撒くが、外骨は、それを記念に取り収めたのであろう。

さて、井上和雄によつて纏められたと目される「山東京伝百年祭記念遺物陳列目録」の端書ならびに末尾には次のように記されている。

本年は京伝先生歿後滿一百年に相当するを以て、本月八日其の菩提所向院に於て記念祭を執行し、併せて遺物展覧会を開催したり。当日の出品数三百に垂なんとし、観覧者無慮五百名を計ふるに至れり。亦以て本会の企圖の空しからざらしを喜ばずんばあらざる也。茲に其の品目と出品者の芳名とを録して聊か斯の拳を記念せむと欲す。然して斯の拳に賛同せられたる諸氏に対し、深く感謝の意を表明するもの也（略）

当日の出品にして尚ほ右に漏れたるもあるべく、又説明の悉くされざるもあるべし。是れ倉卒の際に於て免れ難き所。敢て他意あるに非る也。若し夫れ出品に対する真贋の差別に至つては我れ関せざる所とす。井上和雄識

先の新聞記事と照合すれば、百年祭への参加が一五〇人ばかり、展覧には五百人を超える観覧者があつたということか。出品数は四百とも三百とも定かではないが、いづれにせよ、山東京伝関係での展示としては、今日この規模を超えるものはない。新聞に「内珍らしい品は劇場の図（蜀山人の賛）、芸子色くらべ、天明年間吉原六ツ時、京伝、京山、焉馬、三馬合作の扇子等であつた」とあるのは「陳列目録」に言う以下のものであるうか。所蔵者ごとに抜粋し掲げておく（傍線箇所参照）。

○喜音家正次郎氏

- 一、悪玉誘遊子之図（墨画紙本横幅） 一軸
- 一、青柳之図自賛あり（墨画扇面） 一面
- 一、張交枕屏風 京伝扇面二、京山扇面一、短冊一 一張
- 一、二枚折屏風 京伝其他書画張交 一張

一、劇場図 古画（着色紙本豎幅） 一幅

画中に「日本武運富士狂言尽山村長太夫」とあるに対して京伝の考証あり。文中元禄六年版『雨夜三盃機嫌』及び元禄十五年版『投者二挺三味線』同年版の『諸芸太平記』等を引証して此図は元禄十三年霜月顔見せ「山村座」の図を描きたるものなりと断定せり。末尾に「文化八年辛未夏六月醒々齋京伝」とす。上に蜀山人の賛あり。如左、

宮女如花滿棧鋪。幕中有宝客皆珠。

只今唯見森田櫓。曾並山村長大夫。

毛唐陳奮翰子角甫拜題

尚ほ五六品ありしかど京伝の遺物に非るを以て此所に収録せず。外に『四十八手』一冊及び『早染草』等の版本もありき。

○村上静人氏

一、此翼塚之図（自賛あり）扇面（墨画） 一面

一、京伝三馬焉馬等合作 同 一面

一、京山書「火之用心」（紙本豎幅） 一軸

一、豊広宛手簡（大橋微笑氏の分と同文） 一軸

○村田金兵衛氏

一、芸子色競 第三相錦（北尾政演画とあり） 一枚

一、稚遊見立ばげ物 相錦（無款） 一枚

和装活版本『山東京伝』は、この百年祭および京伝遺物展覧会をうけて、大正五年十一月二十日付で発行者図画刊行会、発行所吉川弘文館（ともに住所は同じ）から刊行された。本書の構成を掲げておく（括弧内は同書記載の頁、挿入された頁記載のない挿絵等を追加していない）。

扉題

彩色口絵（京伝翁像 初代豊国生筆、其儘立斎写）

目次

緒言（一〜二）

戯作者としての山東京伝（三〜五六）

惚気の公表／曲亭馬琴の卑陋／濡燕／命／辻君の念仏百万遍／壮者の老人／相愛の夫婦／京伝の肖像／書翰／浮牡丹全伝の奥附／偽書画偽刊本／印譜／価値ある賞賛／書案之紀／机塚／墓碑／京伝の門弟／画工推挙の事

浮世絵師としての北尾政演（五七〜六一）

其署名の画号／肉筆の自画賛／玉の春の挿画／版画の概目

狂歌師としての身軽折輔（六二〜六八）

京伝の狂歌／京伝の韻文詩／京伝の狂文／京伝の擬古文／狂歌師として推挙されたる京伝／身軽折輔といふ狂名

商人としての京屋伝藏（六九〜七五）

紙製煙草入売出し報條／曲亭一風京伝張／朱子読書丸と小兒無病丸／斯くて京伝店の繁昌

作者画工見立番附（七六）

山東京伝（北尾政演）著作総目録（七七〜八八）

山東京伝（百年祭記念）遺物陳列目録（附録一〜六）

広告

「二ヶ月間の昼夜、専心専意に涉猟を怠らざりし(緒言)」という外骨の言葉を信じるならば、よくこれほどに取り纏めることができたものと感心するばかりである。それでもその構成をみるに、先に挙げた『山東京伝』広告との相違も存しており、広告にあった「雑学者としての醒世老人」の章がない。緒言頭注部に「●離る可らざる所あり」と題して「雑学者としての醒世老人」は便宜上「戯作者としての山東京伝」中に併記せりと説明する。「戯作者としての山東京伝」の章にかなり紙数が割かれているのはそのためでもあり、本書が主に京伝の伝記的事項を記載している以上、戯作者であることと雑学者であることは切り離せなかったのではないかと推察しておきたい。

本書の評判はどうだったのだろうか。東京朝日新聞大正五年十二月十五日付「出版界」欄で、本書について取り上げており、「極めて精透なる考証を加ふると同時に窘束なき奔放なる編者独得の筆致を以て其の一生を叙する頗る興趣あり挿める所の絵画も皆木版にして彩色例の如きまた甚だ見るべきものあり」と評している。また明治新聞雑誌文庫にも関係資料があり、「広告」(GP910.2:S672:6)に国民新聞十一月廿七日広告の切抜が残される。<sup>(3)</sup>東京朝日新聞大正七年一月十六日広告にも「頗る高評」とし、「江戸文学を口にするものは本書を読め!京伝研究にて有名なる編者が幾多の歳月を抛ちて成りたる大天才の評伝、独特の快文章は馬琴を痛罵して火の如く、実に興味深き新春の好読物なり」との一文があり、読売新聞同年一月一九日広告でも「何れにしても、近時出版界の一珍書と推賞すると共に編者にして初めて、能く成せるものと言ふべく、地下の京伝も為めに歛瞑することなるべし」と喧伝する。

本書は、初刷刊行時に巻末に掲載された図画刊行会第二期會員募集広告を除いた形で、大正十年に図画刊行会より再版されているが(大正五年十一月十八日印刷/大正五年十一月二十日発行/大正十年四月一日再版/【定価貳円八十銭】/編纂者宮武外骨〈東京市橋京区新栄町五丁目三番地〉/発行者兼印刷者風俗絵画図画刊行会/代表者林縫之助〈東京市京橋区新栄町五丁目三番地〉/發行所〈電話京橋二九九番 振替口座東京二四四番〉風俗絵画図画刊行会)、



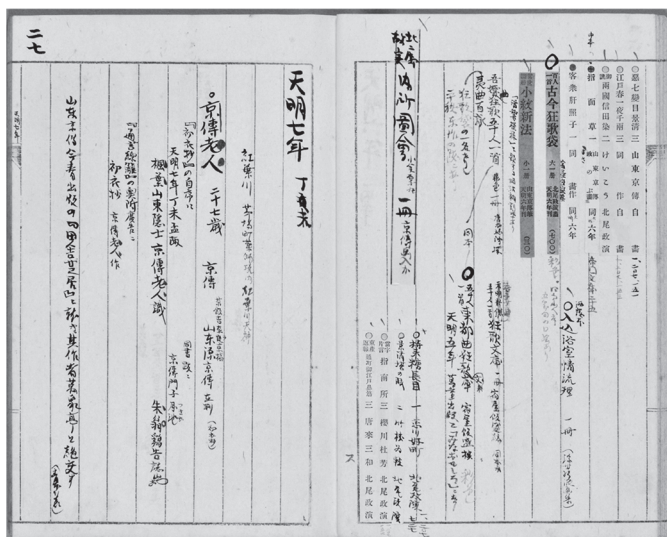


図2 山東京伝年表（ノート）

相応に需要があった、評判であったとみるべきであろう。

用いられた資料・補助した人々

今般確認した明治新聞雑誌文庫に所蔵される資料で、とりわけ注目されるのは「山東京伝関係資料」(1)(2)(3)の三綴である。

その中からすこし具体的に確認しておく。山東京伝関係資料(1)は「京伝印譜 半狂堂主人」「山東京伝年表（ノート）」を収めるが、「京伝印譜」は文字通り印や署名を薄葉の紙に透き写しにしたものが貼られ、時には『忠臣水滸伝』の序文から、版面を切り取り貼られるなどしており、本資料は『山東京伝』四五・四六頁に掲載される印影（彩色摺）に用いられたものと判断できる。『山東京伝』が、こうした透き写し資料をもとに印刷に付されていることは、こうした資料と印刷本を比較することにより明らかである。もう一つの「山東京伝年表」は一頁、時には二頁ごとに年号を上部に記載し、山崎麓「日本小説年表」の該当年度から切り取られたものを貼り

つけ、さらに古典籍販売目録などからの切り抜きを貼り、周縁部に外骨によるメモ書きが記されている【図2参照】。各書目の上部に「\」が付されているものは、原典を確認したという印と理解する。『山東京伝』には七七頁から八八頁にかけて、年表形式で「山東京伝（北尾政演）著画作総目録」が掲載されるが、そのための基礎稿と目されるのである。中野三敏は本資料を未見であったが、次のように的確に外骨の姿勢を評価している。<sup>(4)</sup>

大正五年の当時、既発表の小説年表類といえは明治三十九年刊「新群書類従 第七 書目」の一冊か同年刊の浅倉無声著「日本小説年表」しかなかった。後者はそれから更に二十年を経た後に、同著者の手によつて殆んど三千五百部ほどの大增訂をみて「新修日本小説年表」（大正十五年・春陽堂刊）となり、今日の小説年表類の基礎をなしたが、外骨が本書作成の頃にたよりにした旧版小説年表の内容が如何なものであったかは、前記の増訂部数を見ただけでも容易に想像出来る。外骨が旧版小説年表と、正統帝国文庫の「京伝傑作集」「続京伝三馬傑作集」をたよりにこの京伝著作画作総目録を作ったことは、該目録の上部に記された註記にも明らかだが、この注記を細かくたどれば、この目録は、決してそれらの参考資料の切り貼りではなく、実物に当り得るものはきちんと当つて、或物は年表に政演とあれども実物にはこの署名見えずとか、年表には作者は別人の如くあれど、この作は自画作なるべしとか、この作は後年かく改題されしとか、極めて適確な指摘を行なっている。実見し得た板本は概ね帝国図書館（現国会図書館）蔵本を中心とするようだ（略）

『山東京伝』緒言において、外骨は「本書を編纂するに当つて、従来世に流布せる参考書を検索するに」として曲亭馬琴『伊波伝毛之記』『江戸作者部類』、岩本活東子『戯作六家撰』、無名子『山東京伝一代記』の作品名を挙げる。山

<p>別と終の天のくさしにひきうつて今も星の石とさうらふ 十五夜月 山東京傳</p>	<p>狂歌才藏集 七夕別 山東京傳</p>	<p>③ 徳和歌後萬載集 天明七年首屋三郎叔</p>	<p>④ 狂歌評判傳風 秩文庄司次郎重忠 山東京傳</p>	<p>⑤ 春の野の梅のけ清くふゆては合食の家もどく重忠</p>	<p>⑥ 狂歌評判傳風 未明七年首屋三郎叔 山東京傳</p>	<p>⑦ 色あつた松のくづつ人青露のこもをのどく蝶も見切をち</p>	<p>⑧ 狂歌白鬼夜狂 天明五年首屋三郎叔 山東京傳</p>	<p>⑨ 狂歌白鬼夜狂 天明五年首屋三郎叔 山東京傳</p>
--	-----------------------	----------------------------	-------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	------------------------------------	--------------------------------	--------------------------------

図3 狂歌関連資料

東

京伝関係資料(3)に残された「山東京伝一代記」は国書刊行会『続燕石十種』二(明治四二年三月刊)より切り抜かれたもの、「伊波伝毛之記」として綴じられるのは、「魯文珍報」十六、十八号に掲載された「技芸名誉小伝 山東京伝の伝」。「戯作六家撰」は『燕石十種』一に収載されるが、文中掲載される「山東京伝肖像」が尾形月耕縮写とある活版本は未見。いずれにせよ世に流布せる参考書一群、すなわち活版本が利用されている。『山東京伝』緒言に「京伝の一代を叙せるものにして、比較的最も精細を極めたるは、馬琴の『岩伝毛之記』なり(略)本伝は此『岩伝毛之記』を主として引用せり」とあるように、そうした参考書の中でも、外骨は特に『伊波伝毛之記』を重視した。「戯作者としての山東京伝」の章の内容について「専ら馬琴による京伝の伝記『岩伝毛之記』を適宜取捨しながら、大半を祖述し、その文章に対し、細かく注記を加え、補訂を施し、更には口を極めて反駁論難するという方法」

から成っているとした中野三敏の把握は首肯すべきであり、それはまさに外骨らしい批判のありかたであった。

ほかにも山東京伝関係資料(3)には、協力者からのさまざまな情報(葉書や原稿用箋に記されたもの)が残されているが、特に注目したのは野崎左文からの情報提供である。『山東京伝』緒言に「浮世絵師としての北尾政演は単に『浮世絵類考』に僅々数行の記載あるのみ、狂歌師としての京伝は、何の書にも記述する所なかりし」と記されているように、浮世絵や狂歌についてはあまり良い参考文献がなかったらしい。野崎左文こと蟹廼舎から、自前の原稿用箋三枚に記された京伝の狂歌群は、その意味で「狂歌師としての身軽折輔」(六二〜六八頁)の章を埋めるに足る情報が提供されたことなるう【図3参照】。これとは別に、手柄岡持の業平小町の賛についても情報提供を左文から受けているのだが、『山東京伝』一八頁参照)、注目すべきは、提供された情報をそのまま利用していないという点である。『山東京伝』では左文の記したものをから抜粋し、且つ時には本文の修正を施している。即ち、原典に当たり直しての書物制作を外骨はこなしていたのであった。こうした姿勢は十分評価してよいだろう。「予が見聞せしものも左の數種に過ぎず」(六一頁)とした浮世絵にあつても、山東京伝関係資料(3)にある図画刊行会(吉川弘文館)代表林縫之助からの葉書では、林が博物館で確認した浮世絵「角田川八景 一枚中形」「今様通りづくし 一枚」の情報が寄せられ、外骨はどうやらその情報に基づき確認したきらいもある。多くの援助者の情報を得て、『山東京伝』は成立したことが、一連の資料群から確認できるのであった。

## おわりに代えて

このほかにも明治新聞雑誌文庫に残された資料群からは、まだまだ興味深いことも確認できるに違いない。本資料

は、冒頭に述べた通り、ウェブ上で公開されており、多くの人の前に開かれている。今後の研究を俟ちたいと思う。最後に、稿者にとって興味深かった資料を二点紹介して、この稿を終えたい。一つは、百年祭時に参会者に配られた「狂歌入摺物 春駒押絵図（複製）」<sup>(5)</sup>。もう一つは、井上和雄によって書き写された喜音家古蝶「隠れたる山東庵の事蹟」である。後者は「浮世絵原稿用箋（二十六字十九行）」にペン書されたもので、その筆跡ならびに蜀山人の狂歌「昔の京伝會の京伝」とあるのを「和按 今の誤か」と訂正記載のある点から書写者を井上と判断した（以下掲載分は修訂後の本文）。「隠れたる山東庵の事蹟」は「川柳獅子頭」三巻二号（明治四四年二月刊）の四頁五頁に掲載。国会図書館に所蔵され、図書館向けデジタル化資料送信サービスで確認することが出来る（DOI:10.11501/1511889）。

① 山東京伝先生百年祭記念品 【図4参照】

（封書表） 山東京伝先生百年祭 記念品

（封書裏）

狂歌入摺物

春駒押絵図 京伝画

本図は当時流行したりし歳旦摺物の一にして構図の清楚賦彩の淡雅寔に言外の妙趣あり加之京伝自ら画き自ら狂歌を賛したる点に於て稀観の珍品とするに足らむか残端に「うのはつ春」とあるは文化四年丁卯の春なるべし

大正五年十月八日 図画刊行会

（歳旦複製）

皆友敦丸



図4 歳旦春駒

手まりつくひまもおし絵の細工すき

続飯ねる間も春駒の夢

逆鋒下足

押画にも気をはるこまの綾にしき大まき小まきの裁をあつめて

○ 山東京伝

御細工に念の入たるはる駒や左の袂に三日三夜

錢屋金埒

姫のりのやはらかな手につながれて心地よいとや申春駒

○ 狂歌堂

小ぎれにてはるの初の春駒はのりかけんさへよいとや申

うのはつ春

② 喜音家古蝶「隠れたる山東庵の事蹟」(井上和雄写、「浮世絵」原稿用

箋二十六字十九行)

隠れたる山東庵の事蹟 喜音家古蝶

山東庵が事どもは早や既に、諸書に記されて今更ら云ふも管なれど、未だ世に知られざりし略伝、其他を冬の夜の徒然に、予が祖母より聞き得たれば、左に載する事とはなせり。因に京山死する迄、毎月十五日(富ヶ岡八

幡宮の祭日）には、氏神の日なりとて、参詣を絶さざりしと云。

○長女おみせ、日本橋小伝馬町一丁目売薬商後ち小間物屋、伊勢屋忠助へ嫁せり。

○長男伝蔵、山東庵京伝、吉原弥八玉屋の傾城たりしお百合（源氏名不詳）を妻となせども一子なく、弟京山の男筆之助を養嗣子となし、二代目京伝の候補となせり、時に親友太田蜀山、之を祝して左の狂歌を贈る、

万歳の鼓も二代打ち続く昔の京伝今の京伝

されども筆之助遊蕩の爲め、家出をなし、養父京伝（享年四十九才）卒中にて歿したる後、病を得て小伝馬町伊勢忠方へ戻りて死せり。

○次男慶三郎、京山後ち涼仙と改む、素五万石青山下野守の家中某に贅となり、一女お峰を儲けて離縁となり、銀座一丁目河岸通称立売に住居を定め、再び兄京伝の妻の新造たりし、お組（源氏名不詳）を妻とし二男四女を挙ぐ（後ち故ありて前記峰女を引取り、又伊勢忠方へ養女に遣せり、之れ小子が祖母の実母なり）。

○長女おます、性勝気にて遂に縁なく、独身家に在りて内事を扶けたり。

○長男筆之助、前に記したれば略す。

○次女お福、長州毛利侯に（一説に彦根侯と記せるは誤りなり）綾園と呼び、終世の妾として仕へ、一男一女を生む、後ち殿の逝去に及ぶや、剃髪して栄寿院と号し、麻布榎屋敷に居を賜ふ、之に父京山を迎へて、世を送れり、京山享年九十才、机に筆を執りたるまゝ卒中に歿せり、或書の八十九才は誤りなり。

○三女お玉、森田座振付師市山七十郎の妻と成れり。

○四女お鶴、富山と呼びて、同じく毛利家の姉綾園の祐筆と成り、姉妹共々大に権威を振へり、後ち綾園が生みたる女の、麻布龍土の伊達へ婚嫁するに付き、富山も又その御側女中として、伊達家へ仕へたり。

○次男梅作（京水）、絵を可庵武清に学び、蒔絵を業と為し、妻お静との間に二男あり、信次郎、文太郎と云ふ、共に性愚にして壮年に至るも一家を成さず、父京水の歿しての後、母お静が再縁せる、神田多町青物問屋齋藤方に、食客の身となりて死せり。

かくて後ち、前記富山事お鶴、老年に及び伊達家を辞し、京橋築地に、幸太郎と云へる夫婦養子を迎へ、岩瀬が名跡を継がしめたるも、富山の死するや幾程もなく、養家を離れて何所へ行けるや明かならず、尚当時講談師某に、京伝が名を譲りしと聞けど、之れ又知るに由なし、因に姉おますも築地に同居せりと云ふ。故にさしも名高き、山東庵の家名も、遂に絶ゆるに至りしは、又惜しみても余りあり。

尚京山、綾園、伊勢忠に関する話もあれど、徒に山東庵が名を傷くるのおそれも有れば記さず、読者幸ひ之を諒せられん事を祈る。

以上記し終りて見れば、其文の散漫、又冗長、只小子の不学を愧づ。（完）

附記、今我家に蔵する山東庵の遺物左に、

京伝自画賛一幅、同扇面、及び蜀山より二代目京伝を祝して贈られたる狂歌一幅、又京山書二幅、自筆草稿各一冊、及び扇面、短冊、扁額、又嘗て北越雪譜編纂の爲め、小千谷に滞在せし折、時の名主鈴木ボクシより贈られし小千谷縮の帛紗等、若し心あるの士一夕御来駕あらば、随時貴覽に供すべし。

〔川柳／獅子吼第三卷第二号〕四四、二、五発行。



〔注〕

(1) 『山東京伝』は、『宮武外骨著作集』第六卷（河出書房新社、一九八八年二月刊）に影印収録されており、谷沢永一による解題と、中野三敏による解説「外骨―江戸風俗への乾いた興味」があり、そこでの発言。

(2) 注(1) 中野三敏解説に指摘がある。

(3) 以下、広告本文をあげておく。

○宮武外骨先生編纂。編者多大の歳月と絶大努力結晶

山東京伝 ▼木版彩色挿絵四枚。▼極上等紙和紙一百頁。▼大形和綴頗美装本。

▼定価金老円五拾銭送料市内四銭地方八銭▲

頗快著

江戸時代戯作家の唯一人山東京伝が評伝、編者は戯作者、浮世絵師、雑学者、狂歌師、商人等に亘れる京伝が才能の偉大さを詳細に描出し、殊に馬琴を痛罵せる快文章は編者の独特壇場、長夜の徒然に繙きて大天才の一生を見よ！頗る面白き快書也。

内容

(戯作者としての山東京伝) 惚気の公表、馬琴の卑陋、濡燕、命、辻君の念仏百万遍、壮者の老人、相愛の夫婦、京伝の肖像、書翰、浮牡丹全伝の奥附、偽書画偽刊本、印譜、価値ある賞讃、書案の紀、机塚、墓碑、京伝の門弟、画工推挙(浮世絵師としての北尾政演) 其署名の画号、肉筆の自面賛、玉の春の挿画、版画の概目(狂歌師としての身軽折輔) 京伝の狂歌、韻文詩狂文、擬古文、推挙されたる彼、身軽折輔といふ狂名(商人としての京屋伝蔵) 紙製煙草入売出報條、曲亭一風京伝張、朱子読書丸と小児無病丸、繁昌、番附、著画作分類其他目録等。

風俗絵巻図画刊行会 ■最新刊!

発売所東京市京橋区新栄町五丁目三番地 電話京橋二九九振替東京二四四番 吉川弘文館

(4) 以下、中野三敏による発言は注(1) 参照。

(5) 喜音家古蝶「隠れたる山東庵の事蹟」の資料的位置づけについては、津田真弓『山東京山年譜稿』(へりかん

社、二〇〇四年）、『江戸絵本の匠 山東京山』（新典社、二〇〇五年）に詳しい。

附記 文中でも述べたが、今回の考察を進めるにあたって、東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵資料のオンライン公開「宮武外骨蒐集資料」を活用した。新聞からの引用と禾口菴文庫所蔵本を除き、すべて同文庫資料に基づく研究である。活用させていただいたことについて、記して深謝申し上げる。なおその画像利用についても、明治新聞雑誌文庫の利用条件に基づくものであることを附記しておく（[www.meiji-u-tokyo.ac.jp/digitalarchive\\_reuse\\_meijibunko](http://www.meiji-u-tokyo.ac.jp/digitalarchive_reuse_meijibunko)）。

Research notes on "SANTO Kyoden" edited by  
MIYATAKE Gaikotsu

YAMAMOTO Kazuaki

"SANTO Kyoden" published on November 20, 1916, is a study book written by MIYATAKE Gaikotsu that captures the aspects of SANTO Kyoden, one of the leading gesaku writers of the 19 century, such as Ukiyoe artists, researchers, kyoka poets, and merchants. The book is still well received today from the point of view of introducing the various materials it contains. It was published to commemorate the Buddhist memorial service for the 100th anniversary of Kyoden's death. It is not well known that materials such as flyers and concept notebooks, which were used to promote the publication of "SANTO Kyoden" are kept in the Tokyo University Meiji Shimbun Zasshi Bunko. I would like to confirm the circumstances surrounding the publication of "SANTO Kyoden" as well as the memorial service for the 100th anniversary of the death of Kyoden from the materials and newspaper articles of that time.